

横浜国大柔道部の源流を辿る—横浜高商柔道部の記録から—

横浜国立大学は 1949 年(昭和 24 年)、横浜経済専門学校・横浜工業専門学校・神奈川県立師範学校・神奈川県立青年師範学校の 4 つの官立学校を母体として誕生した。1876 年(明治 9 年)に設立された横浜師範学校にまで遡ると、2012 年で実に 136 年の歴史を数えることになる。果たして柔道部はいつ誕生しどんな活動をしていたのであろうか。

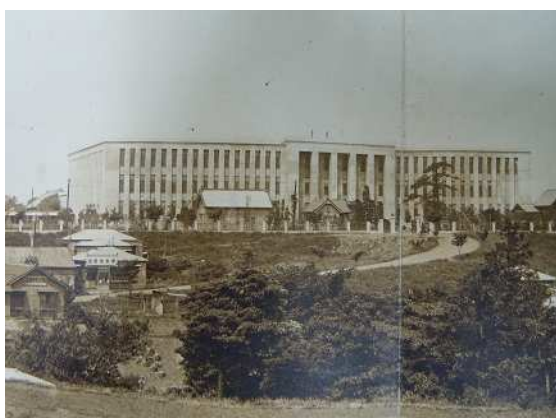


【横浜高商とは】

当時の学制は、尋常小学校 6 年(6~11 歳)、中学校 5 年(12~16 歳)を経て、3 年制の高等学校(17~19 歳)から 3 年制の帝国大学(20 歳~22 歳)に進むか、実業家を目指して 3 年制の高等商業学校、高等工業学校(17 歳~19 歳)などに進む道があった。

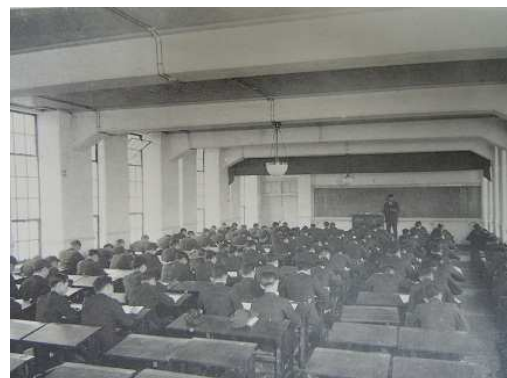
母体となった 4 つの学校のうち現在の経済・経営学部の前身である横浜高等商業学校(1944-1951 横浜経済専門学校)については、横浜国立大学図書館に「横浜高等商業学校卒業記念アルバム(欠落年あり)」と「横浜高等商業学校 20 年史」が収蔵されており、当時の柔道部を概観することができる。

年齢	就学年齢比較			年齢
22				22
21				21
20	貿易科 1 年		専攻科 2 年	20
19			帝国大学 3 年	19
18	横浜高商 3 年	東京商大 専攻科 3 年	東京商大本科 3 年	18
17		商大予科 1 年	高校 3 年 (大学予科)	17
16		商大予科 1 年	中学 4 年終了	16
15				15
14	中学校 5 年	中学校 5 年(4 年)	中学校 5 年(4 年)	14
13				13
12				12
11				11
10	尋常小学校 6 年	尋常小学校 6 年	尋常小学校 6 年	10
9				9
8				8
7				7
6				6



横浜高等商業学校(横浜高商)は 1923 年(大正 12 年)12 月に全国で 11 番目に設立された旧制の専門学校である。第二次世界大戦中に横浜経済専門学校(横浜経専)と改称されたが、1951 年(昭和 26 年)までに 25 回の卒業生を送り出した。1920 年(大正 9 年)に東京商大となった東京高商(現・一橋大学)と神戸高商は 4 年制(予科 1 年・本科 3 年)

だったが他は 3 年制であった。学生の年齢は概ね 17 歳から 19 歳で現在の高校 3 年生から大学 2 年生にあたる。ただし、現在の高校とは異なり教師は「教授」であり、生徒ではなく「学生」であった。



【柔道部誕生＝第1回アルバムから】



大正末期の12年に設立された横浜高等商業学校は、1期生を1927年（昭和2年）に117名送り出している。その第1回卒業アルバムには武道場と柔道部の写真があり、柔道着に身を包んだ7名の学生の姿が写っている。

また、「対商大柔道戦」のクレジットがついた写真も掲載されており、当時、東京商大専門部柔道部との間で対抗戦が行われていたことが伺える。試合は選手15人による抜き勝負で、この年は横浜高商が1人残りで勝利している。

東京商大専門部との対抗戦については、「横浜高等商業学校20年史」に以下の記述があるので引用する。

「五年対商大専門部との定期総合競技会を開くことになり優勝旗を作成した第一回は六月二十九日国立の商大グラウンドで行はれ、本校側は、野球、柔道、剣道、蹴球の四種目に勝ち、陸上競技、籠球、水泳、弓道の四種目に敗れて同点となり、勝敗の鍵は翌三十日の庭球



戦が握ることになったが、果然非常な接戦となり遂に専門部を倒して勝ち、綜合成績九種目中五点を挙げて優勝した。第二回は翌六年六月二十八日本校校庭で展開。本校は九種目中、剣道、柔道、陸上競技、野球、蹴球、水泳に勝ち、籠球、庭球、

弓道に敗れたが総合点六対三で連続優勝した。対一橋専門部定期競技会は僅かに二回で中止し、豪華絢爛たる優勝旗は、両校学生の手によって七年、六郷河畔で焼却された」。アルバムと20年史から推察すると東京商大との対抗戦は柔道部創設当初に始まり、昭和5年には学校対抗戦となったが何かの理由で2年間で終わった、という事のようなのである。

【近県中学校柔道大会を主催＝第2回アルバムから】

翌 1928 年（昭和 3 年）の第 2 回卒業アルバムには「柔道大会」とクレジットのついた写真があり、中学校を対象とした試合を高商が主催していたことが伺える。卒業アルバムには、1931 年（昭和 6 年）の第 5 回まで「近県中等学校柔道大会」の写真が載っている。この大会はいつまで続いたのだろうか。参加していた神奈川県立横浜第一中学校（現・希望ヶ丘高校）の「神中・神高・希望ヶ丘高校



百年誌」には、「昭和 11 年の(中略)横浜高商主催の近県下柔道大会では、横須賀商、日大四商を破り、準々決勝では長野中に惜しくも敗れたが・・・」との記述があり、短くとも昭和 11 年までは継続開催されていたと思われる。

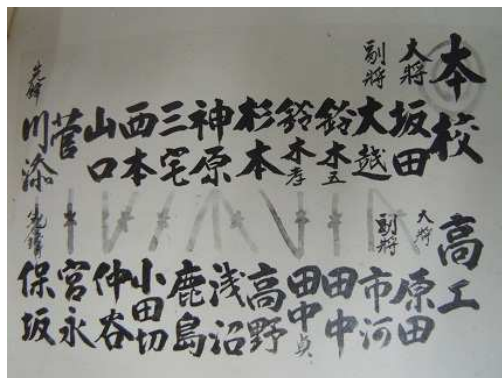
また同じ「神中・神高・希望ヶ丘高校百年誌」には、「昭和 12 年（中略）県下中学校大会が 1 月 31 日、横浜公園の武道館で行われたが 3 回戦で鎌倉師範に敗れた。鎌倉師範は 2 つくらい年齢が上で、すごいおじさんとやっている感じだった」と記載されていて、現在の教育人間科学部の前身である神奈川師範学校男子部（鎌倉）の柔道部は、当時の中学校の柔道大会に参加していたことが伺える。

【対横浜高工戦＝第 4 回アルバムから】

1931 年(昭和 6 年)、第 4 回アルバムには、理工学部の前身である横浜高等工業学校との定期戦が登場する。この横浜高工との定期戦は学校を挙げての試合であり、柔道部以外にも野球部などの運動部が試合を繰り広げている。この年の柔道の試合は選手 11 人による抜き勝負で行われており、高商が大将・坂田を残して勝利している。その後の定期戦について高商 20 年史には 1936 年（昭和 11 年）の出来事として以下の記載がある。「野球部連敗三年。柔道部対高工戦に六年ぶり宿敵を降す。弓道部高工粉碎。（以下略）」。つまり、高商は 1930 年(昭和



5年)に勝って以降、高工に5連敗していたことがわかる。対高工柔道定期戦は、1941年(昭和16年)第15回のアルバムにまで写真があり、この年も大将戦で高工が勝っている。



【高商の柔道＝第8回アルバムから】

1934年(昭和9年)のアルバムには「合宿」の写真が登場する。浴衣姿で首に手ぬぐいをかけ麻雀卓と将棋板を囲んだ学生が写っている。合宿所のようなものである。手前に「経済往来」という経済専門誌があるのは写真撮影のための洒落なのか。



ところで、横浜高商の柔道はどんなスタイルだったのだろうか。当時、多くの高等学校、高等専門学校は寝技を中心とした全国高専柔道大会(大正3年～昭和16年)を目指していた。高商20年史には、昭和9年時点の柔道部指導体制について以下の記述がある。
「開校十周年当時(昭和九年十月)の概況、柔道教師 阿部信文」。阿部信文は旧制鳥取二中(現・米子東高)、東京高師(現・筑波大)出身で嘉納治五郎の愛弟子(九

段)だった。つまり、横浜高商柔道部は講道館足下にあつて、講道館が嫌った“高専柔道＝寝技中心の柔道”ではなかったと推察できる。事実、同時期に設立された名古屋高商(1920年)、彦根高商(1922年)、高松高商(1923年)などが全国高専大会にこぞって出場しているのに対し横浜高商が出場した形跡は、アルバムと20年史には見当たらない。阿部の影響だったのだろうか。因みに、1929年創設の横浜専門学校(現・神奈川大学)は、同じ時期に全国高専柔道大会に出場している。

【柔道部歌＝第10回アルバムから】

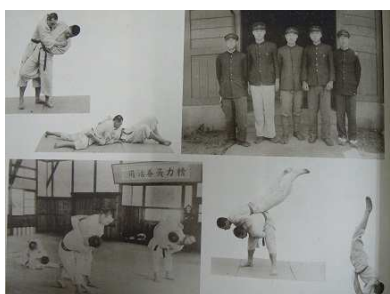


1936年(昭和11年)の第10回アルバムには、「柔道部歌」を道場正面に掲げた写真が初めて登場する。作者・作歌年を記録した資料は見当たらなかったが、以降、道場には掲げられていたようである。

一、時永劫の色見せて 紅蘭花は移ろへど
人間遠く隔てては 一人遍路の一霊地
学びの森に木霊せて 勝利の歌を奏す哉

二、この聖泉の清流を 慕ひて此処に集ひ来る
健児白衣に意気拳る 武勇伝誇るスパルタの
剛健の気風偲びつつ 日々いそしむ柔の道

【戦時色増す＝第19回アルバムから】



1940年(昭和15年)は大きな変化の年だった。20年史によると11月30日、柔道部など運動部の所属がそれまでの「学友会」から「報国団」に変わる。その理由について20年史には「学友会なるものは従来比較的自由的な立場にあったが、報告精神を基とする新体制下、かかる性格の学友会の再編成が要請されねばならぬ。従来の如き学生の自治的

生活態度は改変されねばならない」とあり戦時色が強まっていたことを感じさせる。

これによって柔道部は「報国団」の中の「鍛錬部」に野球部や剣道部などとともに列せられる。この「報国団」結成までの10年間の出来事を列挙すれば以下の通りである。1931年(昭和6年)満州事変、1932年(昭和7年)五・一五事件、1933年(昭和8年)国際連盟脱退、1936年(昭和11年)二・二六事件、1937年(昭和12年)日中戦争、1938年(昭和13年)国家総動員法、1939年(昭和14年)国民徴用令、1941年(昭和16年)真珠湾攻撃。



第15回から第18回までの柔道部の写真からは、その時代の変化は見て取れないが、1944年(昭和19年)の第19回アルバムに写る制服の柔道部員の中には、地下足袋を履き、ゲートルを巻いた姿がある。

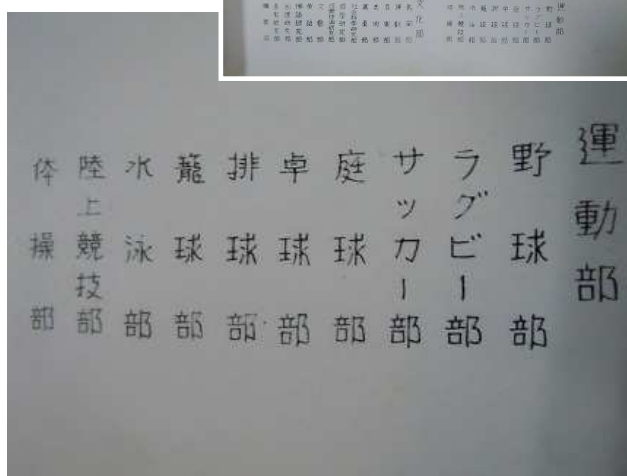
【戦中・戦後＝第24回アルバムから】

1945年(昭和20年)の第20回から1948年(昭和23年)の第22回までは横浜国大図書館にもアルバムが残っていない。しかし、経済・経営学部OB会組織の「富丘会名簿2000」には第20回卒業生の所属クラブとして柔道部の名が付してある者がいる。つまり、横浜高商には1945年(昭和20年)までは柔道部があったと考えられる。それ以降、横浜高商柔道部の名が登場することはなく、残っている1950年(昭和25年)の第24回アルバムの「学生自治会各部、運動部」の欄には、野球部、ラグビー部といった西洋スポーツの名はあるが、柔道部、剣道部、弓道部の名はない。進駐軍による



「武道禁止」の命で学校での稽古ができなくなったためと思われるが、1950年(昭和25年)に再び実施許可が降りても直ぐに柔道部の灯が点ることはなかった。

なお、横浜高商は1951年(昭和26年)の第25回まで卒業生を送り出している。



【おわりに】

1923年(大正12年)に設立された横浜高等商業学校には1945年(昭和20年)まで柔道部が存在した。昭和初期は東京商大専門部との定期戦勝利を目標に、以降は横浜高等工業との定期戦に勝つことを目指して稽古に励んだ。一方で、多くの高等学校、高等専門学校が目標とした全国高専柔道大会には出場せず、講道館から指導者を招いて立ち技を中心とした柔道を志向した。この間、近県の中学校の柔道大会を主催して高商柔道部の存在をアピールしたようである。

本稿は横浜国大図書館に所蔵されている18冊の「横浜高等商業学校卒業記念アルバム」と「横浜高等商業学校20年史」をカメラ接写したものから書き起こした。特に20年史は全てを読み解く時間がなかったため、そこに掲載されている柔道部に関する情報を網羅し切れていない可能性が高い。

また、今回は筆者が経済学部卒であることと高専柔道について関心を持っていたことから横浜高商柔道部に絞って資料を集めたが、横浜国大柔道部の歴史は、横浜高工、神奈川師範、青年師範の柔道部にも遡ることができるはずであり、この点については関心を持つ方の調査を待ちたいと思う。

1985年経済卒 東郷達郎

【参考＝横浜国大の前身4学校の系譜】

横浜師範学校	→	神奈川県師範学校	→	神奈川県尋常師範学校	→	神奈川県師範学校
M9/4		M12/5		M20/4		M31/4
		→	師範学校講習科	→	神奈川県女子師範学校	= 神奈川県師範学校
		M35/4		M40/1		S18/4-26/3

神奈川県立実業補修学校教員養成所	→	神奈川県立青年学校教員養成所学校
T9/4		S10/4
		= 神奈川県青年師範学校
		S19/4-26/3

横浜高等商業学校	=	横浜経済専門学校(横浜工業経営専門学校)
T12/12		S19/4-26/3 S19/4-21/3

横浜高等工業学校	=	横浜工業専門学校
T9/1		S19/4-26/3

【参考文献】

- ・ 横浜高等商業学校卒業記念アルバム
1,2,3,4,5 7,8,9,10 12 14,15,16,17,18,19 23,24 各回
- ・ 横浜高等商業学校20年史
- ・ 富丘会会員名簿2000
- ・ 横浜国立大学30年史
- ・ 神中・神高・希望ヶ丘高百年史
- ・ 続・闘魂 高専柔道の回顧 湯本修治著
- ・ 全日本柔道連盟HP
- ・ 鳥取県立米子東高等学校HP